



市民の知恵と力で

躍進と創造の年に

ふるさとづくりの

計画を大地に据えて

新しい年の始めに、市民のみなさんの御多幸をお祈りします。
振り返りますと昨年は多岐多端な年でした。解決を見たものもあれば円高不況などいまだに結論の出ないものも多くあります。私たちのまちもその動きの激しい世相の中で対応を強めながら十一月一日、市制施行に踏み出し新生八幡市となりました。いわば今年は市制後初めての新年です。市民の方々が市の将来に大きな夢を託し自分たちのまちを自分たちで住みよきまちにしたいと志す。この意気込みが、市長としての責任の重さを強く感じます。



山中市長

いまだ私たちのまちは八幡市基本構想一九九〇年を立案中で、市の総合計画審議会から相当な日時をかけて市民の皆さんと学者専門家などの意見も盛り込んだ案を答申して戴き、議会全員協議会にはかり現在鋭意慎重に協議中です。やがて市議会の議決を経て、ふるさと八幡市づくりが開始されることとなりますが、これまで以上に多くの市民の方々が貴重な意見が寄せられ、またこのことをこの機会に厚くお礼申し上げます。それらの意見などはもと一つ一つの記録となつていますが、これを熟慮致しますとほとんどの方々が「構想案は七色の虹の力を合わせて」

力を合わせて

暮らしを守ろう

昭和五十三年の年頭にあたり、つしんで新年のご挨拶を申し上げます。
市民のみなさん、おめでとうございませう。ここに新春を迎えるにあたり、みなさんがたの清福とご繁栄を心よりお祈り申し上げます。私は現在、議会議員の要職につかされておりましたが、その重責を痛感し、微力ながら円滑な議会運営と市制の伸展を期して、誠心誠意懸命の努力を傾注してまいりました。おかげをもちまして大過なく越年できました。これもひとえに市民各位のご支援と協力のたまものであり、心から感謝の意を表する次第です。



西村議長

かえりみずと、昨年は国民にとって多事多難の年でありました。総選挙抑制策のもとに狂乱物価は一応峠をこえか見えながら、インフレの余地をのこし、加うるに円高による経済不況の深刻化、倒産の続出、就職難の到来など、私たちのまわりで諸情勢は大変きびしく、不況打開へののみを容易に見出せない苦悩を、マザマと見せつけております。不況の余波は巨額の税の減収となつて、自治体を襲い財政難に迫込んでいます。一家庭のくらしも大変だつたと思ひます。

八幡市

基本構想 (案)



撮影 昭和52年8月14日

はじめに

愛宕・比叡・生駒の山々をめぐらした山城の地の西の一角、木津・宇治・桂の三大河川がひとつに合流して淀川となるほとりに、私たちの「まち」はある。

この地は、かつて日本の政治と文化の中心であった難波京・平城京・平安京の近辺にあって、古くから豊かな文化の光を生み、旧石器時代に始まる長い歴史の遺産をもっている。

西には生駒山地の突如とある男山丘陵のなだらかな起伏があり、東には木津川の大きな川に抱かれた平野が広がり、緑の山と、豊かな土と、清らかな水に恵まれている。

日本のふるさと「京都」に接し、日本の近代の象徴「大阪」に近いこの「まち」は、いま大きな変化の過程のなかにある。昭和二十九年に三町村の合併によって形成された二十三・五平方キロメートルの市域は変わっていないが、ここに住む人は、当時の一万六千人が現在では五万人をこえている。ここに生まれ育った多くの人々と、この地を運んで移り住んだ多くの人々が、ひとつの、「まち」の輪のなかに、いま共通の暮らしの根をもって生活している。

古い歴史をもつ「まち」は、社会的な条件のもたらす激しい変化の波に洗われ、その上に、日本全体の経済の変動によって、地方自治体そのものの基盤もまたゆらいているのが現状である。しかし私たちは、未来はみずからつくるべきものであることを知っている。私たちは、この変化の渦中において、ここに望ましい未来をつくりたい、と決意した。

「まち」は単に住所を表す符号ではなく、また単に地図に引かれた区画でもない。「まち」は、私たちの暮らしの組織であり暮らしそのものである。私たちは、いま長らく親しんできた「町」の呼称に別れを告げ、新生の「市」としての第一歩を踏み出すにあたり、この「まち」をさらに望ましい「まち」に育てあげるために、そしてみずからの暮らしをよりよい暮らしにするために、たがいの知恵と希望を集めて、ここに「あすのまち」の基本的な構想を定めた。

私たちは、人類普遍の崇高な理想と目的を抱けた誇るべき憲法を持っている。また私たちは、私たちのめざす姿と「まち」の進むべき道を明らかにした市民憲章を持っている。私たちは、憲法の示す平和と民主と人権の高い理念を規範にし、市民憲章の目標とする「ゆたかな暮らし」、「きれいなまち」、「あたたかい社会」、「すみよい都市」、「平和なふるさと」をめざして、きのうも歩み、きょうも歩み、あすも歩みつつけようとしている。

この構想は、この私たちの歩みが到達すべき「あすのまち」のあるべき姿と、その道程においてなすべきことをえがいたものであり、つねに具体的な計画によって実現へ方法と手段が確保され、市民の参加によって実行が約束されるものである。

もちろん、私たちは、この構想にえがいた「あすのまち」の実現が容易でないことをよく知っている。道ははるかにあるが、ここにえがいた「あすのまち」を「きょうのまち」とすること、私たちはみずからの持てる力をためそうと思う。私たちは、この構想が私たち自身のものであることを誇りとし、この構想の実現に向かって着実に前進を「ここに」始める。

都市の福祉のかい

将来像

部分像

自然のあるまち、いのちを守るまち、

静かなまち、健康の進むまち、

豊かな田園のまち、明るくこどもの育つまち、

働く人々のまち、高い文化と教養のまち、

暮らしのまち、歴史のあるまち、

ひらかれたまち、助けあうまち、

便利なまち、差別のないまち、

安全なまち、人の輪がささえるまち、

きれいな水と大気のまち、市民がつくるまち、

清潔なまち、つねに躍動するまち、

全体像

面積二十三・五平方キロメートル。形状はほぼ水滴型で、緑の山と、豊かな平野と、清流の河川で構築された多様な地勢を持つ。広大でもなく、狭少でもない。平板ではなく、急峻でもない。加えて気候は温和であり、四季の変化に富んでいる。

生活利便施設の活用、市民相互の交流、市民と行政との緊密な連係、土地の有機的な利用、自然の保護と観賞、そのいずれもが容易な自治体として最適な地理的条件に恵まれた「まち」である。

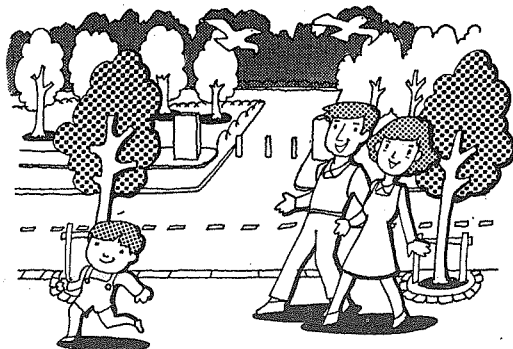
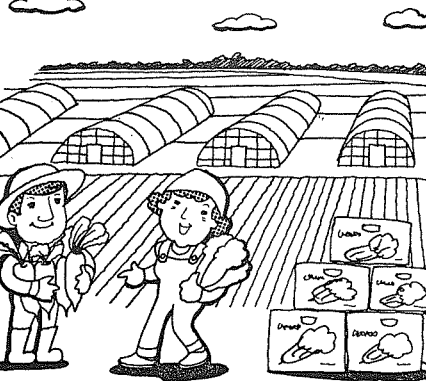
組まれた道路の機能的な網模様、各所に置かれた公共利便施設のさまざまな形姿が、この風景にさらにあざやかな点晴を添えている。

この「まち」に、十万人の市民が暮らしの根をおろして、労働し、休息し、勉強し、成長している。地理的条件に恵まれた適度な市域は、それにふさわしい人口を抱いて、過密ではなく、閑散でもない。

豊かな田園のまち、

市域西南部の丘陵地のゆるやかな東斜面と、中央部から東部にかけての平野には、管理のいきとしいた良好な耕地が広がっている。市域の三割を占める七平方キロメートルの豊かな田園である。なかに散在する集落と、外周にある市街地には下水道が整備され、汚濁のない清潔な農業用水が、木津川からの揚水と地下水の併用によって確保されている。

大規模な圃場整備の実現によって土地利用率が効率化し、特産の主軸である野菜は温室栽培の普及の上に米との輪換システムが確立をみて生産量を高め、梨を中心とする樹園地は集団化によって観光農業の推進がはかられ、茶と菊は限定された規模のなかで技術の改良を進めて高品質を保持し、ともにユニークな産物として評価が高い。



静かなまち、

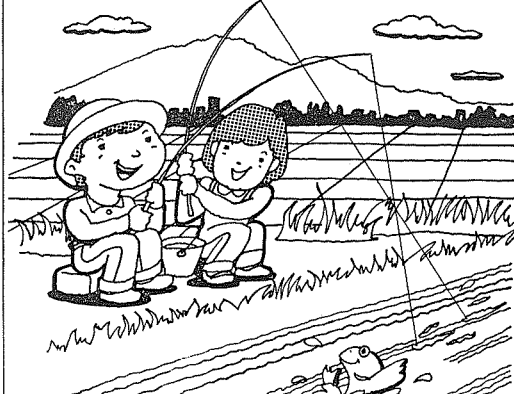
緑の冠をいたいだいた形で男山の西と東と南の三方に、市街地が広がっている。北は男山を東西から包み、南は長く丘陵に起伏する八平方キロメートルの市街地である。市の面積の三分の一を占め、全人口の九割強がここに住んで、住居を中心とした都市の機能がここに展開している。

ここにみる市街は、息づまる黒い屋根の切れめのない集積のみでなく、冷たいコンクリートの密度の高い平坦な林の広がりのみでもない。適度な土地の起伏や高低とともに、地域ごとに整理された低層と中高層の家々が市街に豊かな景観を与え、連続する住居は、庁舎・会館・公園・学校・保育所などの緑の深い公園空間と管理のいきとしいた一部の私有緑地によって適切に遮断されて、多様な変化と十分な余裕を持った市街地となっている。

自然のあるまち、

市域の西北に、高からず低からず、適度の起伏をみせて幾重にも層をなす男山は、内に入れば、樟の梢に鳥影がおり、苔むす岩根から清水がしたたり、下草の繁みには無数の昆虫が生息を競い、足下の溪流には沢ガニがひそむ。二平方キロメートルの自然の宝庫である。緑に映える朱色の荘厳な社殿に千百年の歴史の重みを感じ、うっそうとした竹林に現代文明に陽光をもたらしたエンジンの偉業をよめることのできる憩いの場である。

この男山の東に、一帯の平野が広がっている。稲と野菜と果樹を配して、人為と自然が調和しているのがこの「まち」である。



将来像

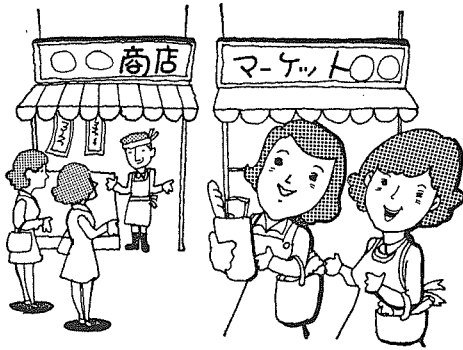
緑ゆたかな文化の都市

ひらかれたまち、

「まち」は、学術文化の都市・京都に接し、産業の都市・大阪の近郊に位置している。

市民の意識の変革によって、かつての従属的な依存の思想はいまでは薄れ、主体的に利用をはかる立場にあるが、日常の生活圏域にあるこの両大都市圏と市民との関係は依然として深い。経済に動員に動員に、まちの能力では及ばない両大都市圏の高度な機能を活用する上で、発達した交通が重要な役割をになっている。

日常的な交通の主軸である電気鉄道は、市内の二駅が駅前広場とともに整備を、市西方の外周駅とともに、最短時間で両



暮らしのまち、

商店は、市街地内の各指定区域を中心にして、市民の購買の需要に応じている。増大する人口に対応して、協同化による多様な業種の集約がなされ、商店の欠けた市街地には商店街の誘導が積極的にはか

「まち」の商業は昼間人口が少ない上に、近隣に大商業地を有するという悪条件の制約を受けているが、商店の努力と市民の協力が相乗効果を生んで、日常の生活用品については、市外へ流出していた購買力の吸収が次第に進出し、市内で相当部分を供給するに至っている。これらの第二次産業には、建設・製造の部門とともに、低利の資金が用意され、市民のくらしにつながる中小の企業の基盤を支えている。

飲食・修理・娯楽などの生活サービス機能も、各業種を網羅するところまで成長し、郵便局、農業協同組合・銀行などの金融機関とともに適切な密度で配置されている。また備わっているものの、数多くの神社・寺院・教会が市民の生活の精神的な部分に寄与しているが、これらは同時に「まち」に静寂な緑の空間をもたらし、文化の遺産をいまに伝える貴重な存在となっている。

日常の暮らしに欠かせない基礎的資源である電気やガスは、電話や郵便などの通信機能とともに、計画的なまちづくりにより誘導されて関係の公益サービス機関の先行投資が適切に行われ、増大した需要に応じた供給がなされている。

働く人々のまち、

市域の東部から北部にかけて、隣接市町との境界を形成する木津川に沿って三箇所の工業地域がある。

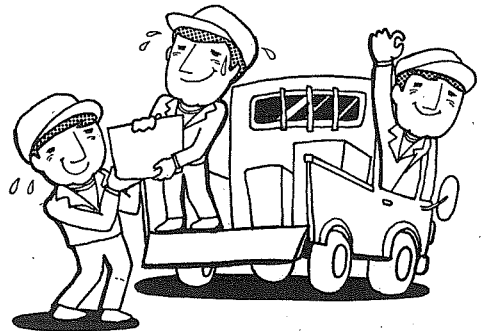
工業生産力の伸長をはかるために一九七〇年代の当初に専用地域を指定し、公害防止優先という方針のもとで、可能な範囲の工業の立地がはかられた。以来、国道一号線や南部丘陵地の一部を中心とする既存のものに加えて、ここに徐々に工場が進出し、工業生産は相当の上昇をみている。

また、市街地南東部の準工業地域は整備され、公害の防止も達成をみた。

「まち」の建設・製造業には、地理的な条件の制約があり、計画当初から想定

されたとおり、その規模は全体として「まち」の人口に比して小さいが、軽工業と建設業を主に、高い生産性と良好な労働環境に目標を置いて、主婦をはじめとする市内雇用の推進、商業振興への波及効果、市財政への寄与など多くの面で一定の役割を果たし、「まち」の構造の重要な一部分となっている。

「まち」には労働セトルメントがあつて、農・商・工を問わず、市内労働・市外労働の別なく、広く働く人々の施設として活用され、たがいの交流を深め、異なる職業間の意識の懸隔をとり去って、よりよい労働の場をつくるための機能をはたしている。

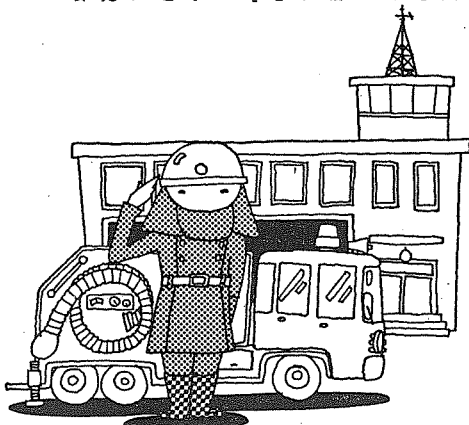


きれいな水と大気のまち、

生活に欠かせぬ水は、府営水道からの供給と自己水源の開発によって、所要量を確保している。

現住の市民優先の立場で人口計画と水道計画の調節に細心の注意が払われ、乱使用を自粛する市民の協力も普遍化している。量の確保とあわせて、配水池の強化と配水管の改良によって、事故の際の断水の局限と低圧地域の解消がはかられ、良質の水が適正な料金によって供給されている。

下水道は全市域に整備され、水洗化による居住環境の向上とともに、汚水と雨水の分流によって市域全体の浄化をみた。流域規模の施設によって、市域内の水路と河川は、市街地と耕地を開かず、市外に上流をもつ防賀川・大谷川を含めて清



安全なまち、

市域の中心である男山東方の市街地は、これに隣接する耕地とともに、かつては内水の被害が常習であった地域であったが、一九六〇年代に施工をみた第一次の改善にひきつづき、排水機場の飛躍的な増強と大谷川の根本的な改良が行なわれ、洪水の課題は解消をみている。

基幹河川である大谷川の常水位の低下がはかられ、これに接続する小河川や水路についてもその改良が進んで、市域の各所でみられた降雨時の浸水と常時の滞水の現象は、すでに過去のものとなつた。男山の東山麓にみられた崩壊の危険箇所には防護の措置がなされている。

鉄筋の耐火構造が多く、危険物を扱う事業所が少ない上に、密集市街地の改造が進み、市民の防火意識も向上して、

火災の発生率は低い。火災の予防と鎮圧の機能は、市域の面積と建築物の規模・建物の適合し、かつ、よく訓練されよく整備されている常備・非常備の公的消防力と、地域や施設や事業所における意識の高い市民参加の自衛組織との連携によって支えられている。

この機能は、日常の交通の安全を守る活動のほか、万一の水害・風害・地震に際しても、緑地・公園・施設などの防災空間が豊かに存在することと相まって、被害の局限をはかる上で、大きな力となっている。

「まち」の治安も、コミュニティ活動の進展とともに向上し、警察施設は新市街地の形成と人口の増加に相応した充実をみている。

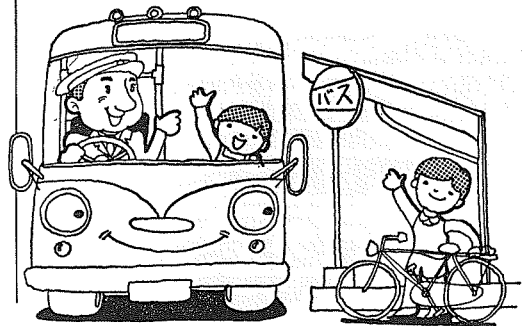
便利なまち、

市域のなかには、ほぼ東西と南北の方向に組まれた幹線街路があり、これに接続する区画街路が住居や商店の戸口につづいている。生活共同施設の利用、行事への参加、日常の買物、市民相互の交流などがこれによってはかられ、「まち」の有機的な活動が支えられている。

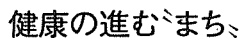
すべてが舗装され、夜は街路照明に守られた快適な道である。幅員に応じて、可能な限り自転車道と歩道が区分され、街路樹が植栽され、防護柵や反射鏡、信号機や横断歩道などの交通の安全のための施設を要所に配し、ゆきとどいた規制のもとに、きめこまかく眼のみえぬ人や歩行のできぬ人の誘導と利用のための施設が配慮されている。暮らしの道である。

市内交通の主軸はバスであり、主街路を路線に、電気鉄道の市内一駅と市域西方の外周駅の各駅前をターミナルを拠点にして、市内巡回のルートと市外へ連絡するルートが十分に用意され、運行の密度も高い。駐車場とともに、自転車利用の普及に応じて、集合場所にはその置場が整備され、市民意識の向上によって交通に障害のない道路となっている。

施設の整備と、規制の徹底によって、交通の利便の反対現象である公害は、通過交通路である国道と府道を含めて防止がはかられ、街区は整理された町名と地番によってわかりやすく表示されている。



将来像



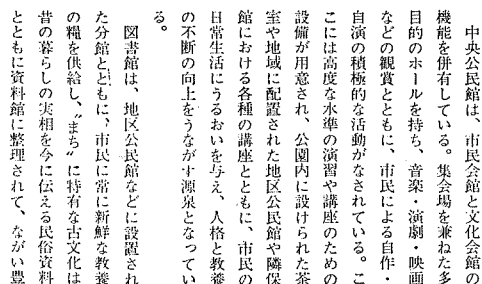
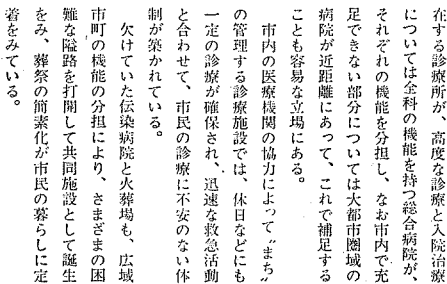
ターに各種の施設が用意され、学校施設の開放と相俟って、卓球・野球・バレーボール・バスケットボール・テニス・サッカー・水泳などの多彩なスポーツが行なわれてゐる。老人は花づくりの作業によつて心身の退化を防ぐべく、その範囲は年齢と性別と体力に応じて多様であり、地域ぐるみの運動会は幼少若老男女さまざまな交歓の場となつてゐる。

これらの活動は、地域・職域・年代などどのグループと、これとを結ぶ一本の市民組織に支えられて自主的に運営され、単に体力づくりの目的にとどまらず、市民相互の交流と親和を深め、地域に定着したコミュニティを形成する上で大きな力になつてゐる。

に於ける。神社や仏閣に保存されている重要文化財とあわせて、これらは市民にふるさとの心を伝える貴重な先人の遺産とされているが、市外から訪れる人も多く、静かに観光の対象となつてゐる。

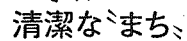
まづ、に伝わる竹細工や陶器などの美術工芸の技術も、各地に存する祭などとの伝統的な行事とともに、適切な復元と保存にはかられ、いまに伝承されている。

一万年前の旧石器時代の人跡を持つ「まづ」の歴史は、市民のためまづ努力によつて次第に発掘され探究され整理されて史書に編みだれ、広く市民のものになつてゐる。



基盤となつてゐる。これらの施設は、社会教育に密接な役割を担ひ児童館・老人の家、市青年の家、市老人福祉センター・労働セツルメント・公園などの市域に適切に配置された各種の施設と有機的なつながりを持ち、少年と青年・壮年と老人、男性と女性のそれぞれの特性に応じながら、全体として世代と性間の間の理解を深めるように配慮された活動が展開されている。

体育の面と同様に、これらの活動から、施設の所在と地域との組織や社会教育に關する各組織との連合体によつて企画され運営され、施設の利用がはかられてゐるのが特色となつてゐる。



運動がつかり定着し、資源再利用の普及も有効に作用して、財政の大きな部分を占める関係行政経費を節減し、現有施設で需要をまかなう上で大きな支えとなっている。

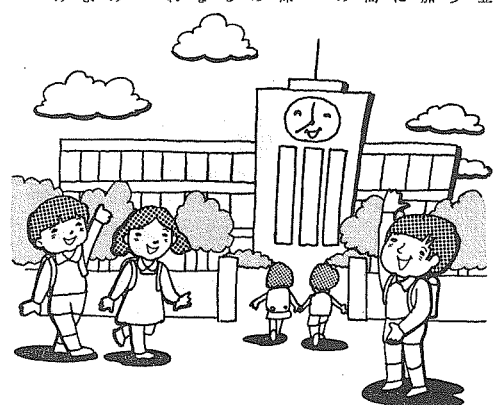
街路や公園などの公共の場所は、溝を含めて、使用する市民個々の配慮と近隣の人たちの協力によって清潔に維持され、各所に老人クラブによる花壇があつて四季に色とりどりをつけている。

市と市民の共同作業で、市街地から雑草は除去され、花木の植栽が進んでいる。小鳥のさすまじりに朝を知り、深い緑と多彩な花のたたずまいに夕べを憩う生活が広く市民のものとなっている。

に外周には運動公園が配置され、広い豊かな開放された風景や山野があり、青少年の家がある。これらの物的環境に加え、地域ごとにも会や指導、研修の組織に支えられて地域と家庭における関心も高く、学びに遊びに夢を追うこともたちの表情は、いきいきとつと明ける。

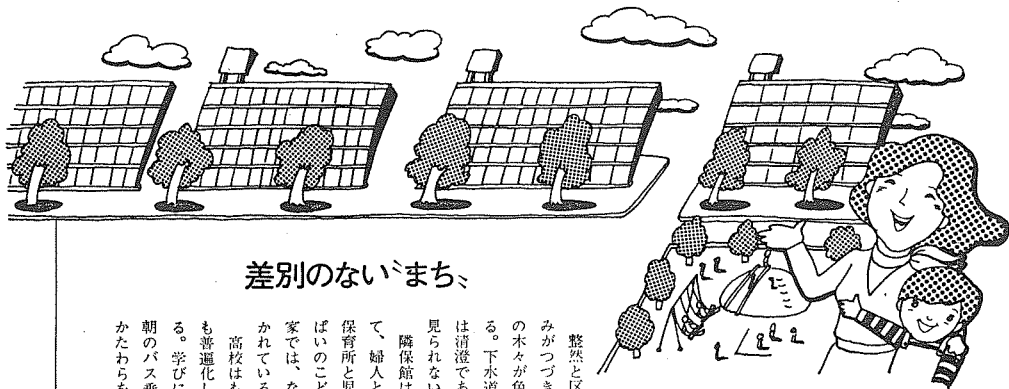
障害のあることもなにも、適切な保育と教育の場が障害の回復の目的も含めて確保され、保育と就学の費用に欠ける家庭のことも、減免・助成・貸付などの援助の措置が大学を含めて配慮されている。

まづに育つこともたちは、あすのまづをつくる力の源泉であり、よりよきふるさとを風土づくりが、まづの教育のひとつの柱となっている。



将来像

緑ゆたかな文化の都市



差別のないまち

整然と区画された街路に面して、家並みがつづき、こどもの遊び場がある。緑の木々が色どりを添える住まいの場である。下水道の普及によって、路傍の水路は消滅であり、降雨時の浸水は、いまは見られない。

隣保館は、教育と文化のセンターとして、婦人と青年を中心に日夜にぎわい、保育所と児童館と児童公園は、元氣いっぱいのこどもたちの群像で満ち、老人の家では、なごやかな団らんがきょうも聞かれています。

高校はもうんのこと、大学への進学も普通化して、就労の条件は向上している。学びに、勤めに、いでたつた人で、朝のバス乗り場にはぎわいをみせ、そのかたわらを銀輪が駅をめざして通りすぎ

る。農作業場と共同作業にこそむくみ、建設現場で汗する人々、店先で店接にせわしい人々。学ばず、働く人の表情は、豊かで明るい。そこには高い市民意識に裏付けられた豊かな生活の環境がある。

部落の解放をめざす人々の積年にもわたる運動の成果と、差別の解消を緊急の課題としてこれにとりくんできた行政の努力と、同問題と自らにかかわる民主と人権の問題としてこれに対応してきた市民の協力によって、かつて存在した差別の現象は、いまでは大半がすでに過去のものととなり、これによって市民全体の暮らしの水準も総合的に向上をみている。

全市民的な合意のなかで、さらに深く、差別のないまちの実現をめざす努力が、きょうもつづけられている。

助けあうまち

年をとっている人も、からだに障害のある人も、可能な限り働く意欲を持ち、それに応じた適切な職場や作業や補充の施設が用意されているのがこの「まち」である。

自活できない状態にある児童と老人、重荷を背負って生きる心身に障害のある人や遺児や母子のみの家庭、思いがけない病気や失業や災害の打撃にひしがれた人々など、弱い立場、困った境遇にある人々には、幾重にも結ばれた強い連帯のきずなを支えがあるのがこの「まち」である。

所得に、医療に、教育に、保育に、住宅に、日常の起居に、国の施策と府の補完措置がなお及び得ない日かげの部分、家族みんなの協力でお助けし得ない欠けた部分を、市民がつくりあげたこまやかで力強い福祉の網の目がしつかり包んで、人権を守るまち。生きがいのあるまちにさらに加えて、落ちこぼれる人はいないまち。泣く人はいないまちが「まち」の合言葉になっている。

福祉のための「まち」の制度は、個人の生への意欲、家族の一致した協力、近隣の自治活動、地域奉仕活動によって肉づけをされ、物的な扶助の水準から飛躍して、家族ぐるみ、地域ぐるみ、「まち」をあげての心のつながりとなって、人々の生活をたがいに支えあっている。

市民がつくるまち

「まち」の行政は、密度の高い市民の参加によって支えられ、市民の便宜と事務の効率化を本位とする機構と、これを構成する能動的な職員組織により動いている。

多角的な広報と広聴の活動によって、「まち」の現実と課題が適時に市民に提供され、市民の率直な苦情や要望や意見が常に行政に新鮮な情報をもたらす、施策に活力を与えている。

肌で感じ得る広さのなかで、各所に配置された施設の日常的な利用とコミュニティ活動の広がりが、市民の意識は「まち」に「自身」を感じるまでに成長し、地域や組織では自由な議論が活発になされ、そこから生まれた提案は、行政の専門的な検討によって具体化され、議

人の輪がささえるまち

「まち」に数多い教育・体育・文化・保健・福祉などの施設は、コミュニティの形成という共通の目的に沿って適切に配置され、運営されている。それぞれが個々の機能を果たしながら、利用者が個々の人間関係を深め、市民の連帯の意識を高める役割を持っている。

施設は、利用の目的と人口と距離を勘案して配置されている。地域には、コミュニティの基礎的な施設として集会所がおかれ、児童公園と保育所があり、児童館と老人の家と地区公民館と隣保館などが、学校施設とともに、各年代と各階層を含めた地域における市民のセンターとして活用されている。

公園は、それぞれが持つ個々の用途に

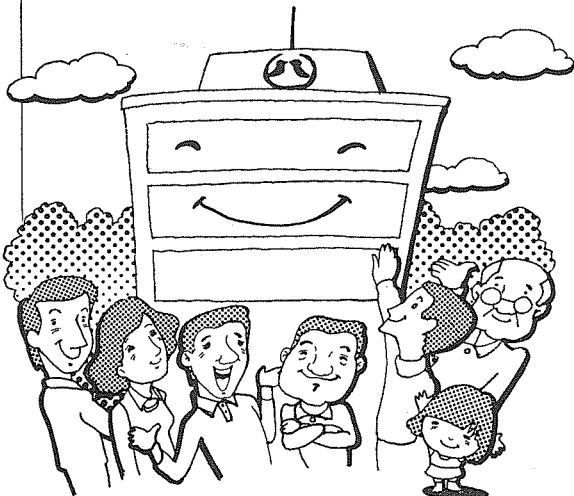
つねに躍動するまち

市民は「まち」につながり、「まち」はより広域の社会とつながっている。

あらゆる面で市民の暮らしと広域社会との関係は深く、自主的なまちづくりの推進とともに、近隣の自治体を集めた力や、より大きい府の組織、国の組織の力を活用して、高い次元の施設の確保や広い分野での環境の保全がはかられている。

自主的なまちづくりの推進も、また広域社会の動向に深くかかわっている。

「まち」の機能は、行政的にも、財政的にも、国における地方制度のもとに置かれている。そのときどきの制度のなかで、望む「まち」をつくりあげるために、



効率的な行政の運用、必要な財源の確保とその重点的な使用などの最大限の自己努力を重ねるとともに、さらに進んで、自治機能の拡大をはかり、地方財政制度を改善し、国や府の施策の充実を求める運動が、市民ぐるみで断続に行なわれている。

内に自治の意欲に満ちた清新な「まち」は、外に向かってもひとつの自治体として、制度改革へのすぐれた提案力と行動力を持つ躍らつとした「まち」であり、市民の参加がまちづくりの原点となつていよう、に「まち」はよりよき広域の社会を築きあげるひとつの原点として常に躍動している。

新しい暮らしのまちをつくる

沿革と概況

地域社会

八幡市には、遠く二千年前には、縄文時代の民の存在を証するところの遺物を待っている。歴史史を待つ、まち、である。

市域西南方の地域には、旧石器時代の人の所産である打石石器が賦され、二千年前の弥生時代の土器を示す土居跡が現存する。また、西宮丘陵地からは、弥生時代、新石器時代の銅鐙が出土しており、その近辺に三箇所には、奈良時代の大規模な寺院跡が所在している。

原始と古代の歴史は、これら九人の遺跡にまつようか否かは、人々によって、はじめて果敢形成された人々の営みが市域のなかで定着して千年以上に及

材として、近世まで商業の発展をみていた。

明治以降は、遠く市町の急速な地域成長と、交通機関の発達によって、地城経済における地位は次第に低下し、都市界産業の労働力の基盤として下影を深めるに至ると、明治期になされた日本川川の水路変更により、水害の常態をみるに至り、基督座落ちあつた農業をもた振興の困難な地理的的条件のもと置かれることになった。

この様な条件は、昭和に入り、大平洋戦争終結との終戦後激増しが収拾不能に至つて昭和二十年の終戦までに大きな変動がもたらへ推移してしたが、昭和三十年代に至ると、主として大阪府東部が住宅開発を大々導入して工場立地環境としての近

て、たかいたに近隣の友誼と交流を促進することから、極めて制限された条件の下で、昭和二十二年は新設したとき、
まちの機能を果たしてきて、
昭和二十二年、新憲法のもとで、この
三町村は、新しい自治を求めて再出
発することになったが、自治権の充
実をはかるため、昭和二十九年九月三
日町村合併形成で、現在の市域を町域とする
八幡町を形成して、
今当分の間の財形規程の一割にわたる赤
字を自己再建にして三年間償還した
町は、旧町村の代表者による公正な第
一回における一体の確立を主張する新
町の設置を経て、暮らしのための基礎的
な施設を整備し、行政水準の向上と目標
とする繁栄の時に入つたが、昭和三十
一年後半からは、さらにその上に、人口
急増が新たな要素として加わり、土地

分、大津川・宇治川、桂川が合流して淀川を形成する。京都府の南西部にある地点に位置している。京都府の南西部にあって、大阪府境と接し、交通至便な立地条件を有している。

東西六・七¹/₄、南北八・五¹/₄の北を頂点としたお盆状の水溜りの形形で、大津川北東方の京都市と久御山町区域内に長町・樋ノ口・高原の飛地と、南方の田辺町の区域部分にある飛地を有している。面積は、これらの飛地を含めて二十・五平方¹/₄である。

市域の西は、陸奥地の西側結節部の裾を境線として牧野と接し、南は、標高四十¹/₄前後の丘陵地が東方に向かって傾斜し、その間には淀川が流れており、

気温

気温は比較的温暖であり、冬期は若干の結氷と大雪をみられることもあるが、積雪はほとんどみられない。

昭和四十八年までの年間平均気温は、最高二七・六度、最低三・五度で、六月から九月と九度となっている。最近の最高気温は三十六度、昭和四十八年)、最低気温はマイナス四度(昭和四十八年)である。

降水量は、年間二百五十千八百mm程度で、六月から九月の四ヶ月間に○四以上の降雨をみているが、年に比べて○四以上および一月にもかたりの降雨をみることはある。降雨時は、木津川や淀川の水位が、水位上位より高くなる。

通し便で、かつ利用度が高い土地が存在し、やがて都市と工業が盛り上がり、社会的余剰のみに置かれていた。このころの都市に昭和と昭和十五年は、旧都市計画の都合で計画区域に限定されていた。戦時体制がひきつづき、戦後の混乱時代を経て、経済的な条件が成立せず、各地に合理的な改善も困難な状況があり、都市化は進んでいなかったが、昭和三十年代後半に至って、広域な地域における余剰の成熟に伴って、都市の形成の時を迎えた。これに倣い、昭和十六年には、近郊型密着法にもとづき近郊密着区域に指定された。

昭和十六年に決定された第二次近郊密着型開発計画は、文化財・自然景観を有する南部地方を計画し、本市の属する京都府

本方針が定着するにつれて、現在策定中の過
この構想と異なるものがある。現在策定中の過
にある京都府市土地利用計画の立案におい
ても、農林部管下の土地利用計画と、京
都府、京都市の土地利用と都市的用地の土
地について、自然環境、京都市及びその
周辺において、自然環境と歴史的風土
保全をはかると、計画的な都市化を
進めることと、都市近郊農業の振興
はかるものと、同一趣向の基本的
針が明らかにされている。
これらの上位計画は、本市市占めて
る位置にあって、特殊甘柿と、本市固有の
による部分のみ相違点は別として、大
のなかにおいて本市の置かれている社
的條件と、それに対処する基本的な
向を大局的に示している。

よりも、その趨勢を把握することが重要である。この第三次国勢総合調査の結果をみるに、大阪圏の待機人口は、この一歩引いた方斜下にあつても、五十九万四千五百八十九人六九六に對して六十年は、千七百二十三万人、六十五年は、千七百八十八万人、六十五年は、千八百九十一万人と、なお増加傾向を伸ばしてゐることが予測される。大阪、神戸及び京市が、都心からの脱出に際し、高層ビルを築いて、これを拠点とし、一方、つぎ、土地利用、施設整備と、農林業の振興に力を入れた人口生活共同体の形成など、多岐にわたる施策が、低密度にのびた財政支出方式の確立とともに、今後の課題となることが判明される。

広域の計画

のいずれもの近郊に位置している。

て、南側の通行を妨げず、計画を遂行するために、南山城地域における都市をさらに象示するものとして、南山城地域を整備施策が進みつつあるが、この作業にあたり、本市の都市を木津川左岸地域については、主体的な地域社会を形成めざして、地域全体の均衡ある発展をす方針での丘陵部における大規模宅地低地の誘導、生活環境の悪化を増加させ、低地部における無秩序な開発を抑制し、農業をはじめとする地域産業の振興と地域にみあった工業及び教育、試験機関の配置に努めるべき」とある。

この新しい局面をふまえて、昭和二十一年十月に策定された第三次全国開港計画では、昭和二十七年と昭和四十四年の二次にわたる長期総合開港計画の工業開発優先を指図しているのに対して、生活消費重視に大々思想の転換を要求するほか、特定港を柱にして、人口が膨大にある大都市圏については、人口中核の抑制と地味への住みかへをほかにも挙げておられる。

これの諸君にたいへん、本市に對する影響が大きいように思ふが、昭和二十一年の今冬、この新しい王様が、

ことを意味している



自然重視の土地利用をはかる

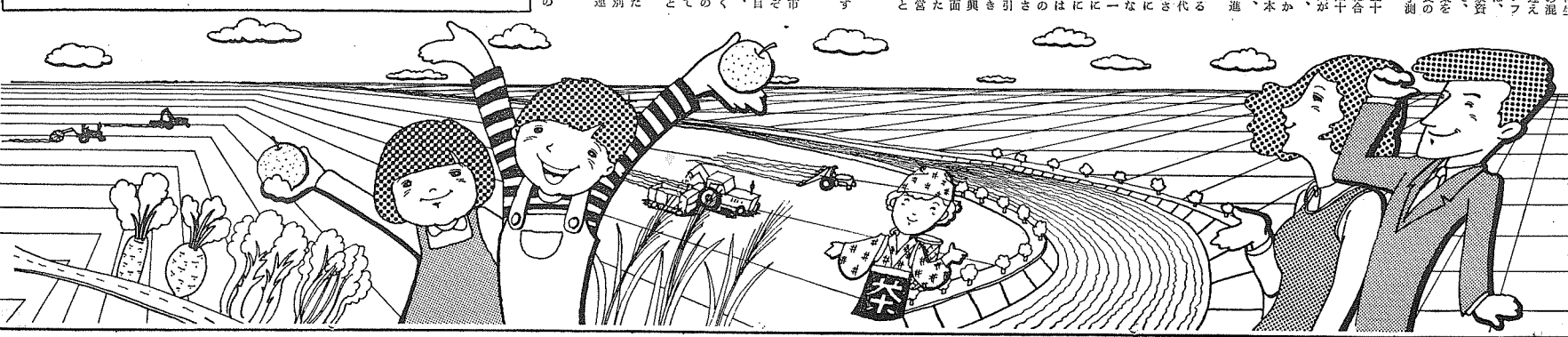
第1節
人口
計
画

八幡市におき
口の動態は、

[illegible]

大山崎町
久保山町
11,876
1,800人
19,876
1,700人
24,176
2,500人
185,876
7,000人
80,876
7,000人
教方市
北田町

〔注〕 本図は、昭和22年11月現在において、
「宅地造成済または造成中もしくは用地取得済
の大規模宅地開発地」と。それによる今後の
増加見込人口を示したものである。



A black and white line drawing of a man and a woman looking at a vibrant, stylized landscape. The man, on the left, has glasses and a mustache, and the woman has short, curly hair. They are both smiling and looking towards the right. The landscape is a panoramic view of a city and nature. In the foreground, there are various plants, including tulips and daisies. A winding road with a dashed line runs through the middle ground, leading towards a city skyline with several tall buildings. A river or stream flows along the bottom of the scene. In the background, there are rolling hills and a rainbow arching over the city. Several birds and butterflies are flying in the sky. The overall style is whimsical and optimistic.

計画

農業の確立を基盤に

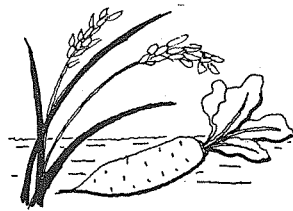
商工業の堅実な振興を進める

第三章 産業振興計画

第1節 農業の振興

現況

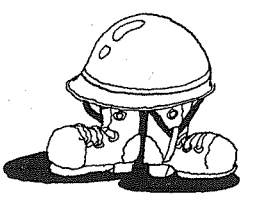
農業は、市中央部から東部にかけての平野を中心とした七百六十の耕地を有し、千石の農業によって支えられている。米作のほか、大豆、市近郊野菜、果樹、茶、養蚕、養蜂など多岐にわたる農業生産が行われている。農業は、本市の基盤産業として、食料の供給と農村の発展に重要な役割を果たしている。



第2節 工業等の振興

現況

工業は、主に市中央部から東部にかけての平野を中心とした七百六十の耕地を有し、千石の農業によって支えられている。米作のほか、大豆、市近郊野菜、果樹、茶、養蚕、養蜂など多岐にわたる農業生産が行われている。農業は、本市の基盤産業として、食料の供給と農村の発展に重要な役割を果たしている。



第3節 商業等の振興

現況

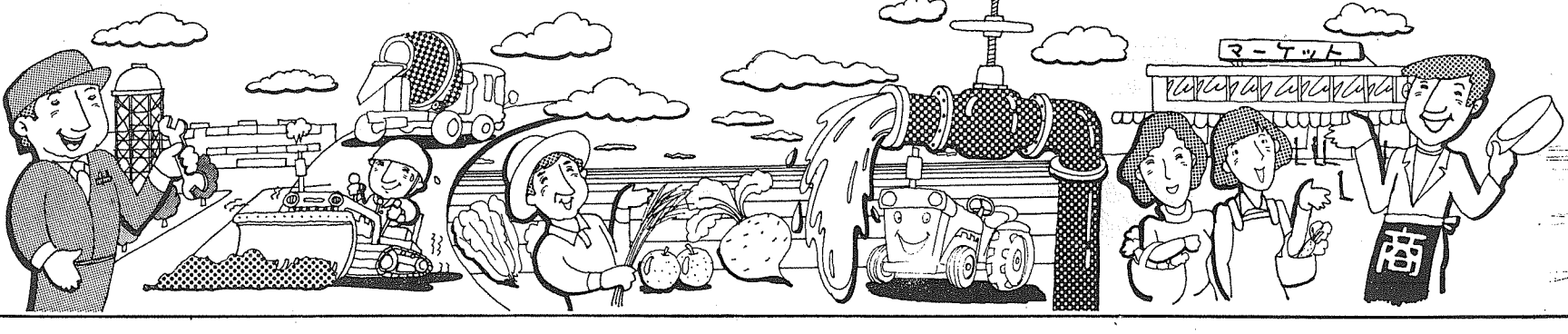
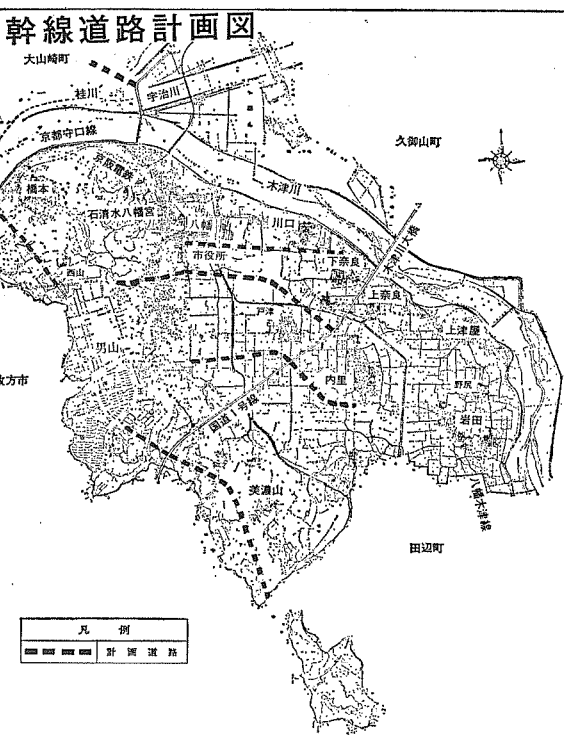
商業は、主に市中央部から東部にかけての平野を中心とした七百六十の耕地を有し、千石の農業によって支えられている。米作のほか、大豆、市近郊野菜、果樹、茶、養蚕、養蜂など多岐にわたる農業生産が行われている。農業は、本市の基盤産業として、食料の供給と農村の発展に重要な役割を果たしている。

第四章 都市環境整備計画

第1節 市街地整備

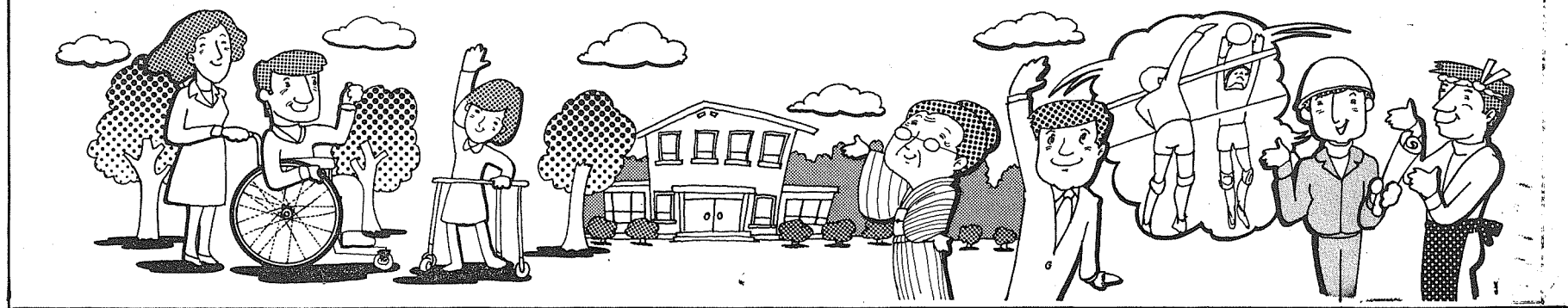
現況

市街地は、主に市中央部から東部にかけての平野を中心とした七百六十の耕地を有し、千石の農業によって支えられている。米作のほか、大豆、市近郊野菜、果樹、茶、養蚕、養蜂など多岐にわたる農業生産が行われている。農業は、本市の基盤産業として、食料の供給と農村の発展に重要な役割を果たしている。



防火のために、市民の参加がはたす役割は大きい





意見書

議員提案として出され、たゞの閣議の云々が當ては決つてゐる。閣議決定に送られ、

お蔭が七十七と圧倒的多く、少くは定額制の引下三、半を差越へ、市は奨励金上横なすに、四市において農地の基盤政府は二割半無償で確保にかゝる。